



**1995**  
**京都精華大学**

■人文学部 / 人文学科  
■美術学部 / 造形学科 洋画 日本画 立体造形 版画 陶芸  
/ デザイン学科 ビジュアルコミュニケーションデザイン テキスタイルデザイン マンガ 建築  
■大学院人文学研究科 ■大学院美術研究科

学部学科構成 沿革	2
人文学部	3
人文学部概説	4
カリキュラム・資格課程	6
教員による学部紹介	8
日本語の伝統と表現	8
「文化」神話の外にでる	10
社会の辺境としての家族	12
性の文化・言葉と行動	14
文化としての環境問題	16
フィールドワーク	18
アメリカ・プログラム	20
タイ・プログラム	22
オーストラリア・プログラム	24
国内プログラム	26
人文学部教員組織	28
美術学部	29
美術学部概説 カリキュラム	30
洋画	32
日本画	34
立体造形	36
版画	38
陶芸	40
ビジュアルコミュニケーションデザイン	42
テキスタイルデザイン	44
マンガ	46
建築	48
学生作品紹介	50
学外実習	56
美術学部教員組織	58
キャンパス案内	60
学外交流	62
アセンブリー・アワー講演会	64
奨学金 セミナーハウス	65
学長からのメッセージ	66
大学院	68
人文学研究科	68
美術研究科	69
卒業後の進路	70
大学見学 オープンキャンパス	72

# CONTENTS

## 学部学科構成

### 人文学部

人文学科 (入学定員300)

### 美術学部

造形学科 (入学定員150)

洋画

日本画

立体造形

版画

陶芸

デザイン学科 (入学定員150)

ビジュアルコミュニケーションデザイン

テキスタイルデザイン

マンガ

建築

### 大学院

人文学研究科 (入学定員10)

人文学専攻

美術研究科 (入学定員20)

造形専攻

デザイン専攻

## 沿革

- 1968 京都精華短期大学を開学  
英語英文科(英米文学コース・秘書コース  
貿易英語コース・ガイドコース)  
美術科(絵画コース・デザインコース)  
第1回アセンブリー・アワー講演  
The Kyoto Seika English Papers 発刊
- 1970 美術科に染織コース増設  
「木野通信」「木野評論」発刊
- 1972 英語英文科に国際文化コース増設
- 1973 美術科に立体造形コース増設  
デザインコースにマンガクラス増設
- 1975 伊谷記念朽木学舎オープン  
The Kyoto Seika English Papers  
を Kyoto Review に改称
- 1979 京都精華大学美術学部開設  
造形学科(洋画・日本画・立体造形)  
デザイン学科(デザイン・染織・マンガ)  
短期大学は短期大学部に改称  
「京都の伝統工芸講座」開設
- 1980 美術学部「学外実習」開始
- 1982 京都精華短期大学美術科を廃止
- 1985 丹後学舎オープン
- 1987 造形学科に版画専攻・陶芸専攻を増設  
デザイン学科に建築専攻を増設  
米アンティオーク大学と提携  
大学構内から平安中期の灰釉陶器の  
窯跡発見
- 1989 京都精華大学人文学部開設  
豪アデレイド大学と教学提携
- 1990 ミシガン州立大学アンアバー校との  
教育交換「サマー・プログラム」開講
- 1991 大学院美術研究科(造形専攻・デザイン  
専攻)を開設  
短期大学部英語英文科を廃止
- 1993 大学院人文学研究科を開設  
豪キャンベラ美術大学と提携  
開学25周年記念イベント連続開催



## 学長からのメッセージ

戦後50年のあいだに社会の危機的状況がここまでくることをとどめえなかったということは、戦争への動きをとどめえずついに学徒出陣をも許容してしまったことと、果たしてどれほどの違いがあったであろうか。その間の類似に強く打たれずにはおられません。



柴谷篤弘学長

冷戦終結後の世界は、当初の楽観的な見通しに反して、いちじるしく不安定さを増してきています。とくにドイツ、ロシア、ルーマニアなどでは、経済的な困難によって、極右勢力が伸長してきました。われわれは、西ドイツで、ナチ独裁政権をもったことに対する批判・反省・謝罪などをふくむ、

人類社会の思想の深化がなされていたことを、日本との比較で強く印象づけられました。それにもかかわらず、ふたたび極右勢力が、東独だけでなく西独でも伸びてきたことは、これまで蓄積した学問的・思想的成果が何の役目をはたしたのか、を問う必要をわれわれにつきつけているように思われ

ます。

昨年十二月に、本学開学二十五周年記念事業の一環としておこなわれたウォーラー・ステイン講演会で指摘されたように、フランス革命以来の自由思想とは、その時々が必要に応じて、狭い範囲の人々にだけ特典・恩恵を分配した、本来「非民主的」なもので、それに要する社会的費用を非特権階級・女性、先住民といった周辺・植民地、あるいは環境問題として子孫におしつけてきたに過ぎなかった、という解釈が正しいのでしょうか。冷戦の終結によって、これらの周辺に追いやられていた人々やその代弁者の不満が、これまでよりも直接に表明されるようになりました。これらの不満を静めるための「外部」費用を支払うことによって、また資本主義経営の伸展によって農村から都市への人々の移動がおこってきたために、資本はもはや期待しうる利潤を確保できません。これが今日世界がおちいつている同時不況の本質なのでありましょう。とりわけ戦後の日本では、軍隊の力ではなく富の力で、戦前から追及してきた一國主義の目標を安易に踏襲してきたという誤りがあったと思われまふ。そのほかに、日本特有の企業形態の矛盾の繰り延べが、合衆国、オーストラリア、東部アジアには見られない日本独自の不況と世界における孤立化を招いていると思われまふ。

これらの新しい政治・経済・社会的状況に関しては、私たちはこれまでしばしば、単なる「混乱」という表現できりぬけてきました。しかしここでは、もつとはつきりと、ありうべき状況の振り幅を考えてみたいと思います。ひとつの極端な可能性としては、さきにふれた極右的な考え方が、保守的な勢力にまで広がった場合として、次のようなことが考えられます。すなわち、次第に困難さを増してゆく資本主義人類社会が、富める少数と残りの部分にはつきりと分離して、少数者が多数者を、つまり「北」が「南」を切り捨てて、自分たちの延命をはかるという図式です。たとえば、今日のユーゴスラビアの複雑な状況は、いりくんだモザイク状の民族・宗教集団のどこまでが「北」に組み入れてもらえるか、の分かれ目に関する争いである、と考えられます。

日本についても、今後はこれまでと全く異なった経営方

式・生活方式・社会システムの再建が不可避になるでしょうが、それが日本で成功しないときは、日本の経済力の世界大の大きさのために、国の外部だけでなく内部においても、現在の社会における強者による弱者の切り捨ての方法がとられるかもしれまふ。

もうひとつの極にあるのは、いろいろの形がありうるでしょうが、国家をおさずに、世界の民衆が直接に連絡しあうということを目標に、実践を深めていくものです。ひとつの考えかたとして、まだ十分ではありませんが、地域中心の組織によるものがあります。どんな権力によっても支配されない、というのが、こうした考え方の宗教的な極致であることを忘れるわけにはゆきまふ。

これからの現実には、この二つの極のあいだをばげしく揺れ動くものとなるでしょう。したがって、いま日本で唱えられている平和・人権・環境という教育の中心目標が、ことごとく踏みにじられる可能性も否定できません。大学で、一方においてこのようなすくれた人類の目標を掲げながら、他方では現在あるがままの社会に奉仕して、卒業生の就職率をあげるためには、現在リストラを介して生き残りを策している日本の経済体制が必要とする人材を養成せねばならないという矛盾があります。しかし、人類文明の継続のために世界を再編する目標は、遠大であつて、それに立ち向かえるように、若い人々を教育するという課題としては、その人たちが従来モデルから離れた新しい生活感覚や労働形態をみずから組織しなおすことに期待しなければならぬのではないのでしょうか。

このような状況のなかで、みなさんに対しては、この大学で学んだ、(自分で自由に考え、自分で責任をもって行動する)という「自由自治」の生き方をつらぬいて、いままでの伝統的な考えにとらわれずに、この大転換期の中で、自分の歩むべき方向を選び、そしてせい一杯その方向を伸ばすように生きていただきたいと心から希望します。

\*これは、一九九四年三月二日の京都精華大学卒業式で、卒業生をおくる言葉としてのべられた、その一部を抜粋再録したものです。

## 開学25周年記念イベント

開学25周年を迎えた京都精華大学は、様々な記念イベントを展開した。どれも学生と教職員による手づくりのイベントで、精華らしい「知」と「遊」の表現として広く学外に話題を提供した。

### ウォーラー・ステイン講演会

12月7日/京都国際会館大会議場

「リベラリズムの苦悶…進歩への希望をなにつなぐか」と題されたこの講演会は、京都国際会館の大会議場を満席にした一五〇名あまりにおよぶ参加者の熱い期待を集めて開かれた。今後二〇年から五〇年はつづくことされる「暗黒の時代」を乗り越え、創造するための知的目標になるような、鮮烈な印象を与えることは聞く者にのこした。



### セイカ・アフリカ・テイ

7月17日/明窓館

フクウエ・ザウオセはアフリカの伝統的楽器イリンバ(親指ピアノ)の名奏者で、世界各地で公演を行っているアフリカでもっとも注目されているミュージシャンのひとり。そのザウオセと仲間たちによるコンサートを中心に、絵画展・ビデオ上映・講演が組まれた「SEKA AFRICA DAY」と銘打ったイベントが開催された。会場となった明窓館は超満員。褐色の肉体から放出される圧倒的エネルギーに観客は魅了され、関西の民族音楽ファンには伝説的なステージとして記憶された。



### ロッキン・エイジア

10月24日/風光館前特設ステージ

アジア四か国で現在活躍中のミュージシャンを招いて、八時間にわたるコンサートを開催した。スリランカからはバイラ(社会的な事件・問題を諷う音楽分野)の第一人者「アンタン・ジョーンズ」、タイからは伝説的フォークグループであるカラワンの元メンバーが構成する「モンコンバンド」、台湾からは胡弓でボビュラーを演じる世界唯一の演奏者「温金龍」、そしてアジア無国籍ロックの歌姫「サンディー」。約一五〇〇人の聴衆が集まり、ラストにはすべての出演バンドがステージに揃い、聴衆の熱いアンコールに応えた。



### 「セイカの森」展

1月11日/春秋館ギャラリー

京都精華大学は北山のふもとに位置しており、緑ゆたかな森に囲まれている。人と森のかかわりを見直そうと、九三年の秋から一年間、有志の学生五〇人が写真とスケッチでこの森の四季をとらえてきた。そのなかから約九〇点の作品を選び「セイカの森」展として展示した。またこの展示会は、叡山電車内で三月二〇日から一〇日間「動くギャラリー」として洛北のひとの目を楽ませた。

